

記念シンポジウム「草の根国際交流の役割と今後の課題」

市民レベルの国際交流・協力活動を顕彰する「第20回 毎日国際交流賞」(毎日新聞社主催、外務省後援、クボタ協賛)の受賞記念講演会と記念シンポジウムが9月27日、大阪府北区の毎日新聞大阪本社オーバルホールであった。

毎日 世界で花開く草の

世界で花開く草の



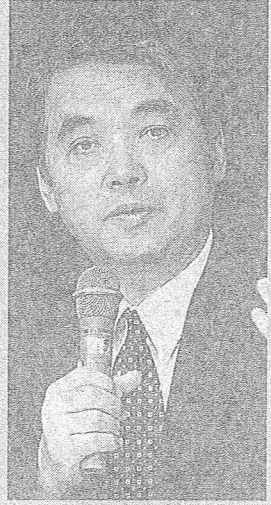
第20回 毎日国際交流賞 表彰式 受賞記念講演会

記念シンポジウムは、過去の毎日国際交流賞受賞者で、選考委員でもある熊岡路矢さん(61)と日本国際ボランティアセンター(JVC)理事、第4回団体受賞にコーディネーターに、▽菅波茂さん(61)とAMDAグループ代表、第7回団体受賞▽徳永瑞子さん(60)とNGOアフリカ友の会代表、第14回個人受賞▽レシヤード・カレドさん(58)とカレドの会理事長、第8回個人受賞が、紛争地などの安全管理や、国際協力活動の課題などについて意見を交わした。当初参加を予定していたベジャワール会現地代表、中村哲さんは、スタッフの伊藤和也さんが派遣先のアフガニスタンで誘拐・殺害された事件の影響で欠席した。

◆活動の安全確保 熊岡 NGOスタッフの安全確保をどう図っているか。菅波 25年の活動で死傷者は一人も出ていない。①運の強い人を送る②相手から人質を取る③相手の血縁共同体社会のおきてをよく研究するの3つが理由だ。04年12月のスマトラ沖地震の際、AMDAは紛争地帯の被災地2カ所にも入った。スリランカ北東部の反政府組織「タミールの虎」が支配する地域では以前から、攻撃を受けやすいよう虎の本部の隣に事務所を置

き、虎の組織の人間に事務所が入ってしまっていた。これが「人質」。現地組織の幹部同士血のつながりを安全のために使うことも必要だ。また運の強い人は、派遣を頼むとすぐに「行け」と言う。いろいろ質問する人は何か(悪い予感を)感じているということなので行かせない。この3点で危機管理をしてきた。徳永 安全と言われている中央アフリカで93年に活動を始めたとき、部族紛争が頻発した。03年3月のクーデター時は日本に待機していたが、何もかも略奪されたと聞いた。今は日本

を「ファミリー」と呼ばれる関係を AMDAグループ代表 菅波 茂さん すがなみ・しげる 広島県生まれ。77年、岡山大学院医学研究科修了。84年、カンボジア難民キャンプで活動した医師らとAMDA設立。「救える命があればどこへでも」をモットーに、世界各地で地域保健医療活動や自然災害の緊急医療活動を推進。30カ国に支部、プロジェクト実施は50カ国に上る。



◆国内外の活動両立 熊岡 国外と国内の活動をどう両立させていますか。菅波 今後、外国の人が日本にたくさん来て、内なる国際化が進む。海外の習慣や社会規範が持ち込まれる時、摩擦が起きる。AMDAの国際医療情報センタ

に拠点を選び、年に2、3回、現地に行くが、何か起きる時は受け入れる覚悟を持たないといけない、と肝に銘じている。アフリカは広く、移動手段が飛行機しかない。この1、2年、コンゴ民主共和国での人道支援中、事故で四十数人が死亡した。現地で交通事故に遭うと、ほとんど助からない。そういうことを受け入れることが必要と思う。レシヤード 相手側のおきてを守るのとは基本スタンスと違う。相手の生活様式や文化に従って一緒に暮らすことで親近感が生じる。行動が目立たないことが安全につながる。また、相手の需要に見合った協力をすることが信頼を生み、大きな武器になる。

基本は地元の価値観の尊重 日本国際ボランティアセンター 理事 熊岡 路矢さん くまおか・みちや 東京都生まれ。80年、タイでJVC創設に参加、インドシナ難民救援にあたる。カンボジア、ベトナムなどの農村開発、アフガニスタン、パレスチナなど紛争地での人道支援にも携わる。現在、東京大学大学院客員教授、国連難民高等弁務官駐日事務所アドバイザー。



互いに育っていくことが大切 徳永 瑞子さん とくなが・みずこ 福岡県生まれ。看護師、助産師。九州大医学部付属産婦人科卒業後、71年、旧ザイール(現コンゴ民主共和国)の診療所勤務。93年、中央アフリカの首都バンギを拠点に会を設立、HIV感染防止に取り組む。03年のクーデター後は日本に拠点を置く。聖母大国際看護学教授。



境にも適応している。今の若い人たちに非常に可能性を感じている。レシヤード 学生たちには、日本の当たり前前文化だった「もったいない」の精神がなくなっている。学校でよく講演をするが、国際社会の実情とともに、日本も50、60年前のこんな時代を乗り越えてきた、今の

よく知る必要がある。国連など国際機関にも「メンバーシップ」という差別があり、大きな壁になっている。そのことを踏まえる必要がある。徳永 治安の問題で03年に帰国した時、現地の人に仕事を全部任せましたが、私ももっとうまくやっていった。帰国が彼らにチャンスを与えた。途上国というところがあがるが、そうじゃない。民間団体は永遠に居られないので、現地の人たちに自立してもらわなければいけない。私は日本でNGOを育てるなどの仕事をし、交流しながら互いに育っていく。それが国際交流で一番いいことと思う。レシヤード 援助は永遠ではない。最終的に相手自立しないこと、どうにもならない。協力の目的と時間の目標を明確にする必要がある。彼らの能力や思いを生かし、技術移転をきちんとして自分でもやっていけるようにするためには、互いの信頼が必要だ。熊岡 国際協力で難しいのは、援助を受ける側だけでなく、援助する側も、その行為に自己満足することがある点。お互いに自立する必要がある。

◆NGOの課題 熊岡 今、NGOが抱える課題は。菅波 日本のNGOが分かっていないのは、日本の教育と、国境を越えた世界は全く別ということ。世界は差別だらけだ。その差別が何を基準にしているか、

需要に合った協力が信頼生む カレドの会理事長 レシヤード・カレドさん アフガニスタン生まれ。76年、京都大学医学部卒業後、日本の病院に勤務。旧ソ連のアフガン侵襲で帰国を断念し、日本国籍を取得。診療の傍らパキスタン、アフガンなどの難民キャンプで医療奉仕活動を推進。93年、静岡県島田市で医療開業。過疎・無医地区で健康相談も続ける。



高年齢者の努力のおかげでゼいたくができる、と話す。今の生活の中で世界の状態を把握し、世の中にはこんな生活もあると知ること、そして自分に何ができるかを考えることが重要だ。熊岡 菅波さんからも若い人へメッセージを。菅波 海外へ出ると、日本以外はすべて血縁共同体

社会と違ってほしい。彼らにとっては、血のつながった身内、友人、赤の他人の3種類しかない。キーワードは「ファミリー」。相手に「あなたとファミリーのように付き合いたい」と言わせれば間違いはない。ぜひ「ファミリー」と呼んでもらえる人間関係をつくってほしい。



明日へ伸び行く

受賞記念講演

また、シンポジウムは、過去の受賞者4人が「草の根国際交流の役割と今後の課題」のテーマで議論を深めた。【構成・池田亨、稲垣淳、日野行介、写真・幾島健太郎】

シエアの活動の基本は「プライマリ・ヘルス・ケア」の理念です。健康はすべての人にとっての基本的人権という考え方で、住民のニーズを基本に、住民参加の医療や保健を行うとか、医療アクセスの公平性を尊重するなど、の原則を立てています。シエアは四半世紀にわたり、海外と日本との活動を有機的に結びつけることに努力してきました。現在の海外活動拠点はタイ、カンボジア、東ティモール、南アフリカです。

海外での活動を振り返ると、85年の飢饉に苦しむエチオピアでJVC（日本国際ボランティアセンター）と共に行った現地の病院での緊急医療活動が契機です。有意義でしたが、医療協力が地域の保健レベルを恒久的に引き上げることの限界を知りました。住民自身

今日は素晴らしい賞を頂きました。喜びでいっぱいです。私は「3年B組金八先生」というドラマの脚本を書いていました。始まったのが79年です。カンボジアをそれまで治めていたポル・ポト政権がとんでもないことをしており、79年にポル・ポトが追い出された時、一般のカンボジア国民もタイに向かつて逃げたんです。そこに国連が入り、タイ国境に難民キャンプができました。そのニュースが日本に流れてきました。私もこれは大変だと思ひ、ドラマの中で「受験一本やりでなく、世界のことを理解する必要があるのではないか」という場面を書きました。以来、いつかカンボジアに行こうと思っていました。90年に先に中東に行きました。90年は日本にも私にとっても揺れ

交流賞

個人受賞の同「JHP・学校をつくる会」代表理事で脚本家、小山内美江子さん(78)が「共に生きる」と題して講演し、それぞれの活動や国際協力への思いを語った。

国際

PO法人「シエア＝国際保健協力市民の理事(61)が「プライマリ・ヘルス・ケアと半世紀——『人びとと共に』を求めて」

心の根の心

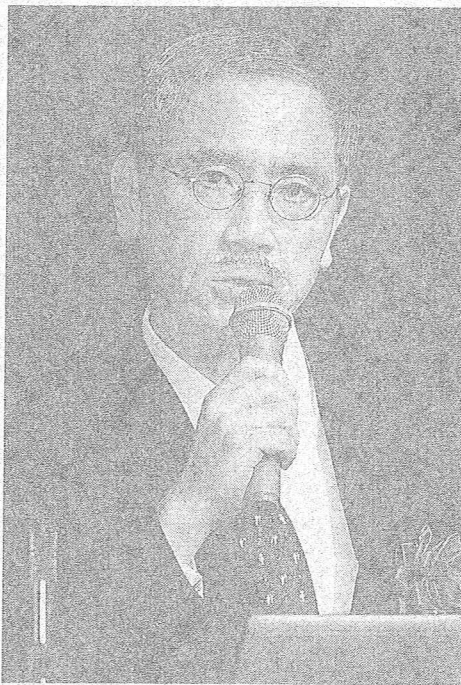


「心を根を張り」をテーマに行われた記念シンポジウム。大阪市北区の毎日新聞大阪本社オーバルホールで

プライマリ・ヘルス・ケアと保健NGOの四半世紀——「人びとと共に」を求めて

当事者主権の市民社会に

シエア＝国際保健協力市民の会代表理事 本田 徹さん



が問題解決能力をつけるのを我々が見守り育てる視点が重要だと気付かされました。カンボジアでの活動は88年からです。1地域に6〜10年のスパンでかかるといっています。タイでは下痢予防活動から始め、94年からはHIV感染の移行労働者支援をタイ国境で始めました。国内の活動も重要で、シエア設立間もない84年、東京・山谷に医療ボランティアとして入り、NPO「山友会」と提携して活動は今も続いています。もう一つは在日外国人医療支援です。横浜市の港町診療所とシエアが定期的に無料健康相談会を行います。劣悪な職場条件での労働を余儀なくされる人は結核のリスクが高く、相談者の罹患率は全国平均の十数倍に達します。大阪府の統計ではホームレスはもっと高い。感染症ですから医療アクセスの実現が重要です。オーバー

わりの、伝統的な助産師に医学的基礎知識を教えるなどして地域の保健システムを向上させるのです。今は地域の保健ボランティアが保健所の活動に刺されない生活上の工

共に生きる

JHP・学校をつくる会 代表理事 小山内美江子さん



た年でした。イラクがクウェートに侵攻し、サウジアラビアがアメリカに助けを求めます。アメリカがいろいろな国に声をかけ、兵隊がいろいろな国かた年でした。イラクがクウェートに侵攻し、サウジアラビアがアメリカに助けを求めます。アメリカがいろいろな国に声をかけ、兵隊がいろいろな国か

気負わずで生きることから

ら来て、サウジに陣を敷きます。これが湾岸危機です。先進国で兵隊を出さなかったのはドイツと日本だけでした。この年に母が91歳で亡くなりました。ものすごく

はじめ国内外で保健医療支援などで教育施設再建 小山内さん

へ関心を持ちました。「いつかはカンボジアに」との思いを抱き、90年秋、イラクがクウェートを侵攻した湾岸危機の際、ヨルダンの難民キャンプでボランティア活動をしました。ボル・ポト政権下で破壊されたカンボジアの教育施設を再建するため、93年にJHPを設立し、これまでに手掛けた校舎は200棟を超えます。音楽、美術などの情操教育も進め、活動はラオス、インド、アフリカ諸国にも広がっています。国際協力を支える若者の育成にも積極的です。最近の世界情勢を見ると、超大国を中心とする大きな力が、弱く小さな人々を抑圧することが少なくありません。毎日国際交流賞はアジア、アフリカをはじめとする小さく弱い立場の人に、草の根レベルで援助の手を差し伸べ、心と心の交流を長年実践してきた人を表彰してきました。ささやかな賞ですが、弱い人たちの立場に立ち、心の交流を進めてきた意義は小さくありません。今後ともご援助をお願いします。

選考委員長報告 佐々木高明さん 国立民族学博物館名誉教授